

---

# 十三番目の禁科図書

江頭 彩佳

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

十三番目の禁科図書

### 【Nコード】

N2604Y

### 【作者名】

江頭 彩佳

### 【あらすじ】

誰かを裏切る人より、信じる事を諦めてしまう人の方が多い。

夢と現実が交錯し、想いと想いが絡み逢うとき、あなたは誰を信じるか。

信じる心に、勇気を。

譲れぬ誇りに、力を。

愛よりも、強い想いで。

何よりも、強い願いで。

真の勇者に、最強の剣を。

## 第一頁：禁科図書

「ホームルームを始める。連絡事項はなし、以上だ。日直、号令。」

担任の松嶋先生のホームルームはいつもこんな感じ。最も、誰も文句を言う人なんて居ない。

むしろ生徒の間では好評だ。帰りのホームルームなんて、みんな早く帰りたくてウズウズしてるんだから。

チャイムと同時に、生徒が廊下に吐き出される。

「麗華〜!」

「うん?」

教科書を鞆に詰め終わった所で声を掛けられた。

「今日も図書委員?」

「うん。そっだよ?」

放課後は図書室で返却本の整理をするのが私の日課。

「ごめんっ!!この雑誌、ついでで良いから図書室に戻しといてくれる?」

「うん、分かった」

「麗華っち〜。こっちもお願い!」

別のクラスメートからも雑誌を受けとる。

「ホント、いつもごめんね〜」

顔の前で両手を合わせて拝む二人。

「いいよいいよ、ついでだし。それじゃあね」  
バイバイ、と手を振ってから教室を出る。

「持出禁」と書かれたシールを指でなぞる。  
いつものクラスメートが、いつもの通りに私に雑誌を預ける。これも日常。

「失礼します」

「あ、麗華ちゃん、ちょうど良かった。先生、これから職員会議だから、後お任せしちゃって良いかしら？」

「分かりました」

鞆を下ろしてカウンターに急ぐ。

「あら、また雑誌を無断で持ち出したの？あの子達にも困ったものね……」

私の手にある雑誌を見てため息をつく。

「まあいいわ…それじゃよろしく」

駆け足で出ていく先生を見送る。

カウンターに入ると、見慣れない堅表紙の大判が置いてある。

「何…？」

くすんだ赤色の分厚い本。手にとって――。

「――あ、麗華ちゃんっ！！その本…！」

「はいいい…！」

急に戻って来た先生の声に慌てて手を引っ込める。

「禁課図書だから、悪いけど書庫に戻しといてくれる？奥から二番目の棚だったはずよ。書庫の鍵はその一番下の引き出しね。それじゃあ今度こそよろしく…！」

先生の足音が遠ざかったのを確認して、もう一度本を手にとってみる。

ずっしりとした重み。表紙にも背表紙にもタイトルは書いてない。

「……」

表紙に手をかけて思案する。

先生からは”見てはいけない”とは言われていない。けどやっぱり禁課図書だし……気が引ける部分もある。

「むむむ……」

お前はいつたい何者なんだ？

本に問いかけても答えが返って来るわけでもない。

「ま、いいか」

それよりも返却ボックスに入れられた本を片付けないといけない。

「う……」

思わず唸り声が漏れる。

かごに突っ込まれた本の山。

かごの置かれた図書室の入り口から、カウンターまでの距離、10メートル。

「重いんだよなあ……」

いつもより若干多い気がする。何回かに分けて持って行こう。腕捲りしてかごに手を伸ばす。

「……悪いんだが……」

「はいいい！？」

またしても不意に声を掛けられ、手を引っ込める。

「…ああ、悪い。ビビらせるつもりはなかったんだが。返却された本の中に量子力学の本は無かったか？」

背の高い男の…先輩だった。

「あ…えと、りょうしりがく…ですか？」

頭の中で、ライフルを持った猟師と熊がお相撲を繰り広げる。

「ああ、物理の先公に聞いたら、『もう返却した』ってたから、多分あるはずなんだが」

「はあ…」

曖昧に返事をして、返却本の山に目を戻す。

「このかこん中か？」

「はい、返却された本は全部その中です」

先輩は少し考えた後、

「じゃあねえ…よつと」

かごを抱え上げる。

「あ…あの」

フラフラとした足取りでカウンターに向かう背中に声を掛ける。

「ん？どうせカウンターまで持ってくんだろ？」

「いえ、重く…ないですか？」

「お前にはもつと重いだろうが…それよりもその赤いのをどかしてくれ、邪魔でかごを下ろせねえっ…」

カウンターの中央を占拠している、禁課図書をあごでしゃくる。

「ああすみません！！」

急いで本を脇にどかす。

「よ…つと」

かごから一冊ずつ取りだし、タイトルを確かめながらカウンターに積み上げていく。

「ん？」

何となく眺めていると、顔を上げた先輩と目が合った。

「あ、わ、私、この本直してきますね!!」

引き出しから鍵を引ったくり、逃げるように書庫へ向かう。

うわあ、絶対変な奴だと思われたらどうなあ…。

うわあ…。

うわあ…。

負のスパイラルを振り払い、書庫の鍵を開ける。

「うぶ…」

臭い。

古本独特の臭いに、カビの異臭が混ざり、何とも表現しがたい空気になる。いた。

「奥から二番目の棚。奥から二番目の棚…」

出来るだけ息をしないで早足に進む。

「あ、あつた。ここだ」

奥から二番目の棚、並べられた本の間にはぽっかり隙間が出来ている。

「んしょ……あれ？」

隙間が狭くて本が入らない。

「は……い……れ……っ!!」

力ずくで押し込む。

だって早くここから出たいんだもん。臭いし、暗いし。別に怖い訳じゃないけど？

ドンッ！

派手な音を立てて、本は収まった、は良いんだけど。

「うえっ…ゴホッ…ゴホッ」

勢いでホコリが舞い上がり、降りかかる。

「うゝ…最悪」

髪に付着した綿ぼこりを払う。

「ん？」

ホコリとは違う別の”何か”が舞い降りてきた。

「羽？」

金色の大きな羽。

上を見上げてみても本棚と天井があるだけ。

「なんで？」

こんな所に、こんな物が？

背中を嫌な汗が伝う。

「…早く帰ろう」

長居は無用。早く新鮮な酸素を。

来た通路を引き返す。

「うん？」

振り返って二、三步進むと、目の前の光景に立ち止まる。

「…階段？」

暗くて良く見えないが、通路を挟んだ向かい側、本棚と本棚の間に螺旋階段がある。

二階にまで続いているようだけど、入り口には鎖がぐるぐる巻きにしてあった。

「…」

回れ右。入り口に向かってダッシュ。

「息切らせてどうした？」

「へ？…そんなこと…ない…ですよ？」

何とか誤魔化そうと試みる。

「そんな事より先輩は何してるんですか？」

私が戻った時には、先輩はカウンターに肘をついて、じっとこっちを見つめていた。おかげで、私が書庫から飛び出した瞬間にまたしても目があったわけで。

「…お前を待ってたんだが？」

いきなり心臓が止まりそうになる。

「…大丈夫か？」

手に持っている本を、私の目の前で振る。

「探してた本が見つかったんで、早いとこ貸し出しの手続きしてほしいんだが」

「…はいはいそうですね。」私”を待っていたんじゃないかって” 図書館委員”を待ってたんですね。

「個人カード出してください」

カウンターの前に回り込みながら先輩に言う。

「おう。…お前、何怒ってたんだ？」

「別に怒ってませんっ！！」

差し出されたカードに貸出印を叩きつける。

「怒ってんじゃないか…」

先輩の呟きは無視して、個人カードの名前を見る。

苔岡修作

「の…のりおか…？」

読めない。

「こけおか、だ」

私の手からカードを抜き取って続ける。

「まあ、初対面の相手に正確に読まれた事あねえがな」

「はあ…そうですか」

「んじゃ、どうもごろうさん」

背を向けて片手を振りながら出ていこうとする先輩を呼び止める。

「あ、あのっ！！」

「ん？」

「あ…いえ…なんでもない…です」

阿佐ヶ谷麗華、14歳。図書室は好きだけど、怪談と暗くて狭い部屋、そして誰もいない図書室は嫌いです。

## 第二頁：ヒメタルモノ

「うぷ……」

臭い。

古本独特の臭いに、カビの異臭が混ざり、何とも表現しがたい空気がなっていた。

「奥から二番目の棚。奥から二番目の棚……」  
出来るだけ息をしないで早足に進む。

「あ、あつた。ここだ」

奥から二番目の棚、並べられた本の間にぽっかり隙間が出来ている。

「んしょ……あれ？」

隙間が狭くて本が入らない。

「は……い……れ……っ……!」

力ずくで押し込む。

だって早くここから出たいんだもん。臭いし、暗いし。別に怖い訳じゃないけど？

ドンっ！

派手な音を立てて、本は収まった、は良いんだけど。

「うえっ……ゴホッ……ゴホッ」

勢いでホコリが舞い上がり、降りかかる。

「うっ……最悪」

髪に付着した綿ぼこりを払う。

「ん？」

ホコリとは違う別の”何か”が舞い降りてきた。

「羽？」

金色の大きな羽。

上を見上げてみても本棚と天井があるだけ。

「なんで？」

こんな所に、こんな物が？

背中を嫌な汗が伝う。

「早く帰ろう」

長居は無用。早く新鮮な酸素を。

来た通路を引き返す。

「うん？」

振り返って二、三步進むと、目の前の光景に立ち止まる。

「…階段？」

暗くて良く見えないが、通路を挟んだ向かい側、本棚と本棚の間に螺旋階段がある。

二階にまで続いているようだけど、入り口には鎖がぐるぐる巻きにしてあった。

階段の先からは、静かに光と風が漏れている。

心がざわめく。

入り口に巻き付けてある鎖を解こうとするが、南京錠が掛けてある。

スカートのポケットから書庫の鍵を取り出す。キーホルダーには書庫入り口の鍵とは別に、小さな鍵が付いていた。

カチリ。

ためらう事なく鍵を外す。

「…んしょつと」

巻き付けてあった鎖を力任せに引き剥がし、床に打ち捨てる。

キィ…。

格子状の鉄扉を開き、螺旋階段に足をかける。

心がざわめく。

螺旋階段を登りきる。

その先は小さな部屋だった。二畳あるかないかの広さ。あるものは本棚が一つだけ。壁には観音開きの大きな窓があつて、開け放たれた窓からは穏やかな風が吹き込んでくる。

心がざわめく。

ゆつくりと視線を落とす。

赤い絨毯、その床に。

——本。赤い堅表紙の分厚——

心がざわめく。

その本は開かれた状態で床に置いてあつた。つい先ほどまで誰かが読んでいたかのように。

床に膝をつき、本に手を伸ばす。

（ヒメタルモノヨ）

固く目を瞑って、本を手取る。

（ヒメタルモノヨ）

「あなたは、誰？」

本に向かって問い尋ねる。

（ヒメタルモノヨ）

私は、私は――？

心がざわめく。

――ベッドに入った。違う。

――お風呂に入った。違う。

――家に帰った。その前。

――図書室…そう、図書室。

赤い本。

金の羽。

「…お前、何怒ってんだ？」

「禁課図書だから、悪いけど書庫に戻しといてくれる？奥から二番目の棚だったはずよ」

頭の中に今日あったはずの出来事がフラッシュバックする。

「ここは…どこ？」

（ヒメタルモノヨ）

またこの声。

立ち上がって周りを見渡す。

(ヒメタルモノヨ)

「誰！？何！？」

混乱する頭で必死に考える。

図書室は一階。二階の同じ場所は…家庭科室。もちろん家庭科室にこんな一画はないし、螺旋階段もない。

開け放たれた窓から身を乗り出し、外の様子を確認する。

オレンジ色の空。朝焼けか夕焼けかは分からない。

それに高い。地上四階か五階。屋上まで螺旋階段を登ってきたのだろうか？

地上の様子は、森。

「——っ！！」

ありえない。都心部に住んでるわけではないけれど、学校の周りは住宅街だったはずだ。それが今は、見渡す限りどこまでも森。

螺旋階段を駆け降りる。

「嘘…嘘…嘘嘘嘘！！」

目の前に広がる景色は、薄暗い木々。書庫はおろか本棚一つない。「何なのよもう…」

呆然と立ち尽くす。後ろを振り返ってさらに愕然とする。

螺旋階段が消えていた。

代わりにそこにあるのは、一本の巨木。

現状把握に努める。

学校から帰ってから就寝するまでの事は全て覚えている。自分の

名前も住所も言える。

だけどここがどこか分らない。

いつのまに学校の図書室まで来たんだろう…まさか、夢遊病！？

色んな考えが頭をよぎる中、簡単な事に気付く。

つまり、ベッドに入った記憶はあるけど、朝起きた記憶はない。

「夢…」

脱力する。全ては夢なのだ。だからありえない事も平気で起きるに違いない。

その場に座り込む。今更ながら、右手に赤い本。左手に金色の羽を持つていた事に気付く。

「夢の中なら良いか」

たぶん今持っている本は例の禁科図書だろうが、夢の中なら読んでも咎められはしない。

「…」

パラパラとページをめくってみるが、最初から最後まで真っ白、白紙だった。

「ちえ、つまんないの」

金の羽を本に挟み、立ち上がって大きく伸びをする。

木々の隙間から覗く空の色は、どんどんと濃く暗くなっていく。

「つて、夜！？」

こんな森の中で一人野宿とかありえない。

こんな時は白馬に乗った王子様が助けに来てくれるものだけども、なんて妙な妄想を繰り広げていると、

「おい！誰がいるぞ！！」

複数の足音と声。続いて何人もの兵隊さん（？）が現れる。

さすがは夢の中。都合の良いように出来ている。きっと今に王子様が現れて、お城に案内して――

「貴様、何者だ――！」

あつという間に周りを囲まれ、剣を突き付けられる。

「……普通の人間です」

両手を上げて答える。

「レベルは？ 種族は？」

矢継ぎ早に聞かれるが、答えようがない。

「えと……？」

レベルって、何ですか？ そう聞き返そうとした時。

「そこまで」

パンパン、と手を叩く音と共に囲みが割れ、剣がゆっくりと降ろされる。

あ、王子様登場。

こちらに近付いてくる王子様（？）は切れ長の目をしたイケメン。カリスマというか貴族を思わせるような高級感がある。

ただし、何となくタイプじゃない。

「君、こっちに来たばかりかね？」

「はあ……たぶん……」

「そうか、名前は？」

「阿佐ヶ谷麗華です」

「ふむ、アサガヤ……だね」

満足そうに微笑んで続ける。

「この近くは夜になると非常に危険だ。安全な場所に案内してあげよう」

「ありがとうございます」

一応お礼は言うが、やっぱりこの人タイプじゃない。

「よし、連れていけ」

号令と同時に兵隊さんが一斉に歩き出す。

「ほら、さつさと歩け」

兵隊さんの一人に、背中を剣の柄で小突かれる。

むう…お姫様に対する仕打ちじゃない。もうこの夢はいいや。

ほっぺを叩いたら夢から醒めるだろうか、そんな考え事をしていた時、その声は背後から聞こえた。

「やれやれ…また貧乏クジか」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2604y/>

---

十三番目の禁科図書

2011年11月11日05時58分発行